

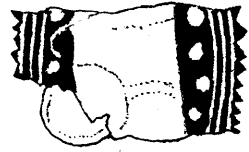
悩める時代の

母親たちを支援するとは(2)

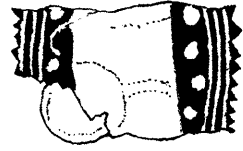
田代 和美

授業でテキストをもとに子どもの権利と体罰について学生にグループディスカッションをしてもらった。

給食を全部食べ終えるまで教室から出してもらえなかった経験のある学生たちが、それがイヤな思い出として残っているにもかかわらず、「でも嫌いな物でも少しでも食べられた方がいいと思う」と言う。そして翻って、「子どもが少しでも食べられたら、そのことを評価してあげる」というような発言をする。真面目な学生である。でもそこに危惧を覚える。子どもは先生の喜ぶ顔を見たさに頑張るの？「辛い経験もした方がいい。その方が人の痛みが分かるから」という発言もあった。多分、自分自身



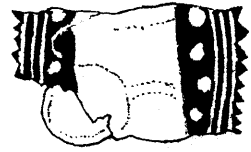
の経験を重ねて発言しているのだろうと思う。でも、自分が結果としてそうだったから、それでよいと一般化してしまつてよいの？「親の体罰は、後のフォローがあつて、自分の事を思つてやったのだと分かれば納得できるのではないか」という発言も多い。学生の条件付きで体罰を容認するかのような発言を聞くと、この人たちはよっぽどそういうことと無縁に育つてきたのか、それとも管理されることに慣れきつてしまつていて、今度は簡単に管理する側に回つてしまうのかと戸惑いもする。授業の間中、私は何か噛み合わないと感じつつ、どうやってこの状況を転回していいのか戸惑い、学生は学生で考えるほど分からなくなると言つた。授業が終わつた後も引つかつたままの自分で、わからないまま考え続けてきたのだが、このような切り口で人間同士の事柄を考える事自体に限界があり、保育の中には馴染まないのではないかということに思い当たつた。人権や体罰というくくりでの話は一般論になりがちだ。子どもの人権を認めましょう。体罰はいけません。虐待はむろん犯罪。一般論にすればそれで終わる。そしてそういう意識を持ちましょうで終わつてしまふ。でも……とどこかにそこにとどまれない気持ちがあるが学生の発言の中からあふれてくるのは、一般論としてではなく、個別な関係性の中での経験に基づいて考へている、そこに具体的なだけかとの関係を想定しているからなのだろう。そういえば、おじいちゃんやおばあちゃんが逃げ場だったことや親に寒空に放り出された時にコートと一緒に出された経



験が語られ、「こういう言葉が出てくるようになったのは、かつてあった何かがなく
なかつたからなのではないか」という発言もあった。

かつてあった何かを探し出しても単なる復古主義になってしまい、現代には何ら意
味を見いだせないのかもしれない。でもかつてあった何かがなくなつたことで新たな
言葉が生じてくるのだとしたら、新たな言葉の中身がそれと無関係に存在するのはお
かしな話であろう。

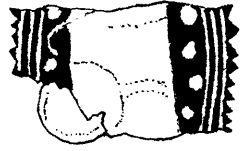
「しつけと体罰の境界線を定めるのが難しい」という発言もあった。ここにもまた嘸
み合わない何かがあり、今の親たちの子育ての悩みを聞いている時に相通じる違和感
を覚えた。子育てについて話す場では必ず「どの程度まで許していいのか」「どこか
ら禁じていいのか」という線引きを求められたり、「どうやってしつけたらいいのか」
というその部分だけを取り出してノウハウを求められて戸惑う事が多い。そんなの答
えられない。そこには学生たちと同じく、一般論で語れない自分がある。自分の中で
はしつけとは、形や行為として外側から与えるものではないと考えている。人と人と
が一緒に生きていくためにどうしていったらよいかを、日々の生活の中で必然性を
持つて感じ取っていく。そういう人間関係の中での積み重ねで身に付いていくものだ
と捉えている。そうすると、じゃあどうやってという一般的な方法論で片づけること
ができなくなる。



人権という言葉自体が個としての人間に備わっているものであり、また体罰という言葉は力関係のベクトルが一方に向いている。人権という言葉で子どもを保護すべき対象とのみ見なしたときには、既に子どもを管理すべき対象と見なす視点に転化し始めているのではないかと思う。人権を否定しているのではない。もちろん体罰を肯定するものでもない。関係性が抜け落ちてしまいがちな視点の在り方に違和感を感じるのである。個を尊重するということは関係性を断ち切ることは違うはずだ。

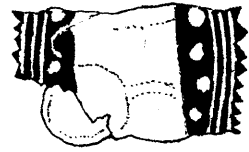
母親たちと集う場で語りを聞いている時にも、その語りに違和感を感じることがある。たとえば、子どもが生まれたことで一度仕事を辞め、いずれまた仕事に復帰したいと考えながら迷っている母親がいる。自分の仕事の力が落ちていく不安にさいなまれ一日でも早く仕事に復帰したいと考えている。でも彼女の母親が仕事で忙しく、小さい頃に夜中に目覚めた時に隣に母親がいなくてたまらなく寂しい思いをしたという。それが自分の中にトラウマとなっていて、思い出すだけで闇に引きずり込まれる思いがすると言う。仕事をしたくない気持ちと自分の子どもと同じ思いをさせたくない思いの間で葛藤しているという。自分がそうだったから必ず自分の子どももそうなり、なぜ決めてかかるのだろうか。

子どもが生まれて仕事を辞めたものの、子育てが辛い。でも人に任せることはでき



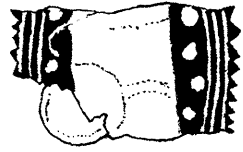
ないと話す母親がいる。その講座の間、別室で子どもの保育をしていて、申し込んでいたにもかかわらず、居ても立ってもいられずに、彼女は保育室から子どもを連れてきて、結局ぐずる子どもを抱っこしながら立ったり座ったりして講座に参加していた。子ども連れ自体は私はいくらかまわないのだが、抱っこしながら「育児が辛くて、育児に関する本や心理学に関する本を沢山読んだ。自分がブレているからキツイのだ」ということは分かっている」と話す彼女の意識と行為に戸惑いを覚える。

初めは親が専門的な知識を語ったり、頭の中で考えたことばを語ること自体に自分が違和感を感じるのかと思ったのだが、結局はこういう語りの中では、子どもや周りの人との関係性が見えていないことに違和感を感じるのだと思う。守るべき存在の我が子である。自分の分身と感じる事もあるだろう。だから語る必要もないということなのかもしれないが、もっぱら自分自身のことを語っているのである。そのような場を集おうとする意志のある人は、意識が高く語れる人々だからなのだろうか。またこのような語りは、乳児を育てている人に多いようにも思う。言葉のない赤ん坊との生活は、気がつくとい今日は誰とも会話を交わしていないということさえあるような日々だ。話したいという切実な思いもあるだろう。しかしそのような生活の中で自身にだけ意識が向いていては、いくら専門的な本を読んで知識を身につけても、子どもがいる生活を楽しむことにはつなげていかないだろう。



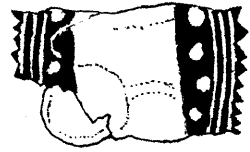
吉本隆明と理学療法士の三好春樹が対談している『「若い」の現在進行形』（春秋社、二〇〇〇年）という本の中に介護の世界の話が出てくるのだが、その中でボランティアと人権意識への疑問が述べられている。ボランティアは心優しく、意識の高い人が多い。だいたい大学出ている奥さんで、子育てが一段落してという人が多いのだが、人権意識を持っていて、「じいちゃん」とか「ばあちゃん」とか呼ぶと怒るのだという。「〇〇さん」と苗字で呼ばなくてはいけないと。だけど自分のことを孫だと思っているおばあさんがいると「ばあちゃん」と言った方がいいこともある。そういう状況判断能力が必要なだと三好氏は言う。ここではまた、相手を客観的対象としてみて分析する近代的な方法論で周囲のみんなから客観的にばかり見られたら人間は普通かなわない、と述べられ、どうも大切なものがヒューマニズムとか人権とかいう言葉によってなくなってしまうたと述べられている。前記の学生の言葉に通じるものだ。

またこの本の中で吉本氏は「人格と呼んだらいいのか性格と呼んだらいいのか、心というふうに呼んだらいいのかわからないですが、万葉時代から人を好きになってという部分は変わらないのではないか。つまり、そういう部分と、文明が発達して意識や、知識、見識も高くなってということは関係ないのではないか」と述べ、知識もなにもなく、大工さんの親方だった自分の親がよく出来ていると思ったエピソードを話



している。そこから話は知識より無意識の豊かさという方向に進む。そして介護の場での相手との関係性について三好氏は「痴呆性老人とかかわる時に、心ここにあらずで、こうしなくてはいけないとおもってやっていると絶対ダメです。目を合わせませんし、さっといなくなってしまう。だけど心を落ち着けてちゃんとかわらうとし、むしろ意図性を捨てて、本人の前で目を合わせて、そこで生じた雰囲気じぶんが動かされてというふうになっていくときに、はじめて何か通じる。意図性を持ってこういうことをしてやろうとおもって、教科書に書いてあるとおりにやろうとしてもまったくダメです。呆け老人はみごとに見ぬきます」と述べる。

介護の場は、今専門化が進み、意識の高い専門職の養成が進んでいる。子育てと非常に似かよった状況にあるように思う。現代の子育ても意識的にこうすべきという所からスタートしていて、子どもがどういう反応をするにせよ、それを貫くことが横行している。しかし人権という言葉によって大切なものがなくなったのか、相手の様子を見てとか状況に応じてとか、そういうことが機能しなくなった、つまり相手との関係の中で考えようとしなから、だから人権という言葉で身を守ることが必要になってきているのか、どっちが先なのかは今の私にはわからない。また知識より無意識の豊かさといってもどうやって無意識の豊かさをはぐくむことができるのだろうかと私にはたとえ立ち止まってしまふ。無意識の豊かさも「かつてあった何か」のひとつなの



であろうか。それとも万葉時代から変わらないものなのだろうか。

子どもを持つことよって初めて親は親となる。第一子の子育てで不安が大きいのは、すべてが初めてだからだ。ある母親が言っていた。「一人目の子どもと一緒に親は親として育っていくのだ」と。自分一人で悩みを抱え込まないように語ることも、誰かが聞いてあげて自分を責めて深刻化しないようにすることも、必要な時に子どもを預かってあげることも、必要な知識を教えることも、時によっては具体的な方法論も、その時々で必要になることがある。でもそれはノウハウとして一人歩きするものでは決してなく、それらが集約していくところは、子どもとの関係の中にいる自分を実感してほしいという願いなのだと思う。無意識の豊かさはその実感とともに現代の私たちの中にも育てられるものだと思う。関係性に目覚めていくための手助けをすることが今現在の私にとつての子育てを支援することであり、そのための頼みの綱は目覚めさせてくれる子ども自身の存在でもある。

(お茶の水女子大学)